

Stage9

Message in an X-bot

X-ボットのメッセージ

作・トニー・ブラッドマン

絵・ジョン・スチュアート

<読むまえに>

お子さんが読むまえに、この本についてお子さんと話すといいでしょう。

- ・表紙と裏表紙を見ましょう。この本に関するヒントが隠されています。
 - ・2-3 ページを開いて「これまでのあらすじ」を読んでください。『物置の中の「そいつ」』(The Thing in the Cupboard)というお話を自分の言葉で話せるか、お子さんにたずねてください。
 - ・ほかのページをパラパラめくって絵を見てください。このお話でどんなことが起こると思うか、お子さんにたずねてみましょう
- 自分のスピードでこの本を読めばいいよと、お子さんにいってあげましょう。

<ひっかかることば>

ここにあげるのは、お子さんがこの本を読むときにひっかかりそうなことばです。

robot ロボット

mystery 謎

grabbed つかんだ

message メッセージ

uploaded アップロードした

computer コンピュータ

switch スイッチ

hologram ホログラム

[p. 1]

X-ボットのメッセージ

作・トニー・ブラッドマン

絵・ジョン・スチュアート

[p. 2]

『物置の中の「そいつ」』(The Thing in the Cupboard)という本の中で、マイクロサイズになったタイガーは奇妙なロボットと出会います。そのロボットは、金属でできた、おそろしいクモみたいな姿をしています。

[p. 3]

タイガーは逃げますが、「そいつ」はペしゃんこになってしまいます。マックスはジョーンズ先生に、自分が直してみてもいいかとたずねます。

ジョーンズ先生は、「そいつ」が、ただのおもちゃだと思っています。マックスは、そうは思いません
……

[p. 4-5]

1 章——奇妙な小さいロボット

放課後、マックスは「そいつ」を家に持ち帰って、さっそく作業にかかりました。まもなく、足をまっすぐにし、胴体を元のかたちに戻しました。しかし「そいつ」は動きもしなければ、うんともすんとも言いません。

マックスは綿密に「そいつ」を見ました。小さなロボットかなんかだったのでしょうか？ タイガーは、この物体が追いかけてきたと言っていました。謎でした。

これはいったい何なのでしょう？ どこからやってきたのでしょうか？

[p. 6]

マックスは、アントならどうすればいいか知っているだろうとわかっていました。そこで、アントに電話をかけて、家にきてほしいとたのみました。

「うわあ、すごいかっこいい！」アントは小さなロボットを見て言いました。アントはマックスからロボットをひったくると、ていねいに見ました。「X1 NASTI って、どういう意味だろう？」アントはロボットの前面を指さしながらたずねました。

マックスは肩をすくめました。

[p. 7]

「まあいいや」アントは言いました。「もし直せたら、ぼくのものにしてもいい？」

「いや、ダメだよ」マックスはそう言って、「そいつ」をひったくり返しました。マックスはそのロボットを持っていたからです。

「いいよ」とアントはそっけなく言いました。「だったら、自分で直しなよ」

[p. 8]

2章——伝えようとして

その夜、マックスは長い時間、ロボットにかかりっきりになっていました。それでも、ロボットは動きもしなければ、うんともすんとも言いませんでした。マックスはアントに怒ったのはよくなかったとわかっていました。マックスにはアントの助けが必要でした。

[p. 9]

翌朝、マックスはアントに電話をかけました。電話には出ませんでした。そこで、メールを送りました。

アント、たのむ、助けてくれ！

ロボットはまだ動かない。

きみがいないと、直せない。

:-[

アントから返事はありませんでした。そのとき、マックスはひらめきました。

[p. 10]

マックスはロボットの写真をたくさん撮りました。それをパソコンにアップして、メールでアントに送りました。

「まずはロボットを直そう」マックスはメールに書きました。「そのあとで、ロボットをだれのものにするか話し合おう。ねえ、アント、お願いだから……」

[p. 11]

アントはロボットの写真をじっくり見ました。これはいったい何なのか？ その答えを知る方法はひとつだけでした。アントはマックスに腹を立てていましたが、ふたりで力を合わせれば直すことがで

きることがわかっていました。

「わかったよ」アントは返事をしました。「マイクロサイズの隠れ家で、30分後に会おう」

[p. 12]

3章——力を合わせる

マックスがマイクロサイズの隠れ家に到着すると、アントがそこで待っていました。

「それで、きみの案は？」マックスが言いました。

「とっても単純だよ」アントは言いました。「ロボットの内部の何か小さいものがこわれてるんだと思う。ぼくたちも小さくなれば、直しやすくなるんじゃないかな」

[p. 13]

「どうしてすぐに思いつかなかったんだろう」マックスは感心して言いました。

ふたりは腕時計のダイヤルを回して……

[p. 14]

マックスとアントはロボットを隠れ家の中に引っ張り込みました。アントはロボットのなかを調べました。すぐに、どこが悪かったのか発見しました。

アントがマックスに必要な道具を言うと、マックスは友だちにそれを渡しました。

[p. 15]

「できたぞ」アントがついに言いました。

アントはスイッチを押しました。ブンブンという音がして、ロボットの両目が光りました。そして、前によくめきました……

[p. 16]

4章——追いつめられる！

マックスとアントは後ずさりしましたが、ロボットはせまりつづけます。ガタガタ、ブンブン、カチカチと音を立て、カタカタとあごを鳴らしていました。

「うわあ、やめてくれ！」マックスは叫びました。「タイガーは物置の中で追いかけられたって言ってたな」

[p. 17]

「どうして、そのことを先に教えてくれなかったんだよ」アントがうめき声で言いました。「なんとかかわしてみよう……」

ふたりはドアに向かって突進しました——でも、ロボットはちょこちょこ走ってきて、行く手をさえぎりました。無理やり、ふたりを壁のほうに追いつめました。

[p. 18]

突然、ロボットが立ち止まりました。

「きみたちにメッセージがある」ロボットは奇妙な声で言いました。光線がロボットから出てきて……

ふたりの前に、若い女性の像が現れました。

「うわあ、ホログラムだ！」アントが言いました。

[p. 19]

「これを録画している時間はありませんでした」その若い女性は言いました。「だから、X1がこれを

あなたたちに届けてくれるといいのですが。わたしに言えるのはこれだけ——ドクターXに気をつけて！」

そして、その像はテレビが故障するみたいにシューッと音を立てて……それから消えてしまいました。

[p. 20-21]

5 章——アント、もう一度、再生して

「いったいどうなってるんだ？」アントは言いました。「あの女の人はだれなんだろう？ それに、ドクターXって？」

「わからない」マックスは言いました。「でも、だいたいなことにはちがいない。もういちど、メッセージを再生できるかい？ タイガーとキャットにも見せなくちゃ」

「問題ないよ」とアントは笑みを浮かべながら言いました。「それじゃあ、ぼくがロボットを持っていてもいいかい？ ローバーって名前にしようと思うんだけど」

マックスは友だちに向かって笑い返しました。アントにはロボットの持ち主の資格がありました。

[p. 22]

マックス、キャット、アント、タイガーは、もうすぐこの奇妙な小さいロボットの大群に出会うことになるとは知る由もありませんでした……

Divided We Fall (『仲たがいは失敗のもと』Project X, Stage 10)

[p. 23]

A NASTI Surprise (『びっくり NASTI 事件』Project X, Stage 11)

[p. 24]

<もっと読みたい人は……>

コミュニケーションについて、もっと知りたい人には、The Deadly Boomslang と Let's Play and other things animals say を読みましょう。

<読んだあとで>

読んだあとで、この本についてお子さんと話しましょう。こんな質問をしてみましょう：

- ・マックスとアントは、どうして口げんかをしたのかな？
- ・マックスが、もう一度アントに連絡するために使った 3 つの方法は何だった？
- ・ふたりは、どうやってロボットを直したかな？
- ・アントは新しいペットのロボットに何という名前をつけた？
- ・この本は気に入った？ その理由は？

この話をまた読んでみようとお子さんにすすめてください。読む自信をそだて、つかえずに読めるようになります。

<ほかにすること>

現在、わたしたちが使っているさまざまなコミュニケーションの種類について話しましょう。100 年前とくらべて、人とコミュニケーションをとるのは、どのくらいかんたんに、早くなったでしょう？ e メールや携帯メールを友だちに送る練習をしてみてもいいでしょうか。